



歌川広重「東都大伝馬街繁榮之図」 石水博物館所蔵

画期的な アイデアで 流通革命を起し 江戸で活躍した 才覚豊かな 伊勢商人

江戸時代、恵まれた海運事情、良質の伊勢特産物を両手に
”首都・江戸”で大活躍した伊勢商人たち。
井原西鶴に「商い上手」と評され、
江戸名物にも数えられた商法を追っていくと、
時流を巧みに泳いで新風を吹き込んだ
彼らの心意気が見えてくる――。

江戸の人をあっと驚かせた 伊勢商人のアイデア商法

江戸に幕府が開かれて程なく、松阪から江戸に進出した商人がいた。それが、後に「江戸に多きものは、火事、喧嘩、伊勢屋、稲荷に犬の糞」と言われるほど画期的な商法で商売を繁盛させた伊勢商人たちである。ここで言う「伊勢屋」とは特定の屋号ではなく「伊勢商人の店」という意味で、さらに言うなら、諸国から進出してきた商人をくくりに指していた。江戸の町にあつて、それほど伊勢商人は、有名だった。

伊勢商人が進出したのは日本橋周辺で、後に大伝馬町へ集った。呉服、茶、米などを扱う店が連なっていたと言うから、現在の「商店街」である。良い商品を安く豊富に揃え、少量でも販売し、買ってくれた人に和傘などの景品をプレゼントするといったサービスも展開し、大当たりしたのである。最も多かった商いは木綿問屋で、庶民相手に現金売りで木綿衣料を販売した商法は特筆に値する。得意先の武家に入入りして益暮れ精算の掛け売りが常識だった呉服商売の世界を、大きく塗り替えてしまったのである。

商法と言えば、その形態も画期的だった。伊勢商人の多くは江戸の店を、支店(伊勢店)として捉え、主人は伊勢の「本家」で経営の采配をふるい、支店へは番頭を派遣した。これが独特の「店制度」で、「社員」は

伊勢で採用して江戸へ行かせ、のれん分けして店舗を増やしていったのである。

海運流通を確立させ 特産の木綿を大量販売

ところで、伊勢商人が大繁盛した理由の二つに「豊富な品揃え」を挙げたが、それら商品は伊勢から船で運んでいた。

そもそも伊勢湾に面する三重県には古くから港が開けており、大湊、桑名、白子、四日市、津といった良港がひしめいていた。また伊勢神宮のお膝元だったため、早くから機織り技術が根付いていたこと、さまざまな情報や物資、人が常に集まり、機を見るに敏な商人が多教育ついていたなどの背景もある。

そして徳川家紀州藩の保護を受けてからは、他国の船に比べて優先権があったため何かと有利に運んだ。江戸の政治が安定し経済が潤うに従って庶民の消費意欲も高まってくると、伊勢国元の良質な木綿に加えて尾張産や知多産なども扱い、大量消費・新しい商品開発などニーズに次々と応えていった。特に、町人文化が花開いた元禄時代には粋な藍色縞柄の松阪木綿が大ヒット。流行は100年近く続いたようである。

商売に新風を吹き込んだ 越後屋、丹波屋、川喜田屋

江戸庶民もうらやむ財を成し、豪商と呼ばれるようになった伊勢商人。その先駆者と言えば「大黒屋」である。いち早く江戸に進出した呉服商だが、茶や酒、米、大豆なども扱うようになり、今で言う商社のような形態で発展した。「川喜田屋」は、木綿伸買商として大伝馬町に進出し、伊勢木綿や三河木綿、さらに八丈島特産の八丈織を販売。小さな店から徐々に大店へと成長し、のちに問屋となった。その「川喜田屋」と並ぶ豪商の木綿問屋は「丹波屋」だ。新店、亀屋、戎屋、向店と分店を増やして繁栄した。

そして、伊勢屋のなかでも有名店となったのが、伊勢の国(現在の三重県)出身の三井家「越後屋」である。店先に商品を並べて現金で売り、広告を出し、出入りの商人に卸して諸国で商売させるなど、誰も考えつかなかった商法を次々と実行して大成功。当時の商人はこぞつてこれを真似たという。

また、伊勢商人ゆかりの偉人も少なくない。船が難破してロシアに漂着、苦難を乗り越えて帰国した大黒屋光太夫。東・西廻り航路を開拓した河村瑞賢。桑名で古萬古を焼き、江戸で陶器問屋を営んだ沼波弄山。国学者の本居宣長も松阪の木綿問屋・小津家の生まれである。